

カキ「刀根早生」の優良結果母枝及び結果枝の資質と収穫適期

農業研究センター 果樹研究所 落葉果樹部

研究のねらい

本県の刀根早生は、昭和50年代後半から本格的に導入され、天草・芦北地域を中心に約120ha栽培され、生産量も今後急激にのびてくるものと予想される。しかし、西南暖地での生理・生態がまだ十分解明されておらず、生産上の問題が多い。

そこで、せん定や摘果等の基準になる優良結果母枝及び結果枝、並びに収量増加と品質向上を図るための収穫適期について検討した。

研究の成果

1. 優良結果母枝と結果枝

- (1) 結果母枝は、短いほど2L果の比率が高く、優良結果母枝としては、長さ10～30cm程度の充実したものを7～8年生で1樹当たり120～150本、成木で200～300本を目安に残すことが適当である。
- (2) 結果枝では30cm以下の短いものが大玉の比率が高く、摘果に際しては、10～30cm程度の結果枝に着果したものを最終的には1結果枝当たり1個、結果母枝当たり2～3個を着果させる。

2. 収穫適期

- (1) 収量、1果重及び糖度とも、成熟期まで急激に増加し、10月10日頃では、9月中～下旬収穫したものと比べ、いずれも約3割以上の増加率であった。
- (2) 従来は、脱渋や軟化防止のため、果皮色がかなり青みが残っている9月中旬に収穫していたが、9月末以降の収穫では、果皮色もよく、100%脱渋可能である。
- (3) 硬度は、収穫が遅くなるほど急激に軟らかくなるが、落葉の少ない園では10月10日頃までは5～6ポンド/cm²あり、CTSD方式による脱渋後の常温貯蔵でも10日以上軟化しなかった。
- (4) 以上のことから、本県における刀根早生の収穫適期は9月末～10月上旬で、果頂部の果皮色がカラーチャートで4～5のときが果実肥大、品質、軟化等からみて適期である。
- (5) なお、果実の軟化防止としては、防風対策や病害虫防除等による早期落葉及び傷果発生の防止に加え、収穫・出荷時の丁寧な取扱いが必要である。

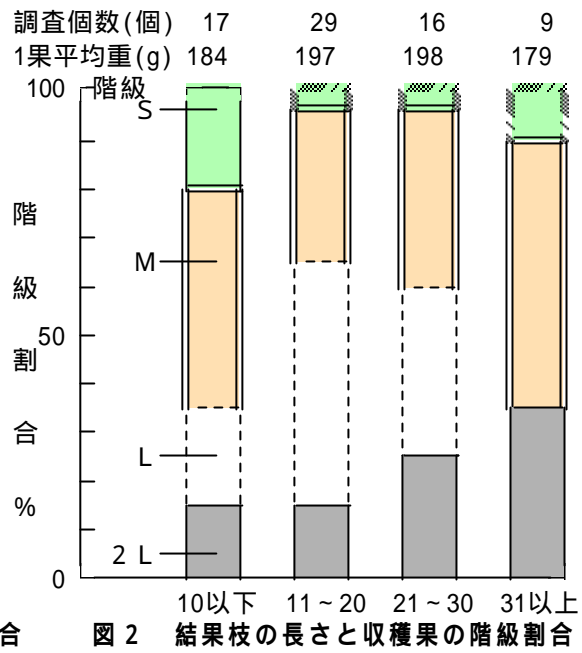
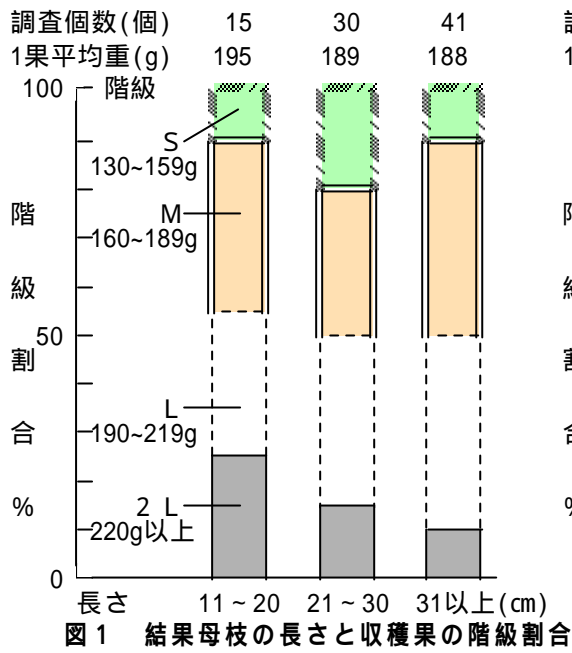


写真1 9月29日に収穫した果実 (カラーチャートで3~4)



写真2 9月29日と10月11日収穫果の大きさの比較 (10月11日収穫果のカラーチャート4~5)

